

マルクスによるヘーゲル哲学批判の再読（下の一）

島崎 隆

一〇 『資本論』第二版への「あとがき」の弁証法

旧稿（中）において、マルクス『パリ手稿』における「否定性の弁証法」の論理構造を詳細に分析した。この箇所は疎外論を前提にして、「反対象化 Entgegenständlichung」などの解釈を含めて、かつて盛んな論争がおこなわれたものであった。そしてまた、ここでの弁証法は、おもに《歴史的弁証法》というべきもので、マルクスは、何らかの歴史的発展に即して、現実の弁証法的運動について関心を抱いていた。ところがそれ以後、マルクスの研究対象は、『資本論』では「資本主義的生産様式」となり、「それに対応する生産関係と交易関係」となり、その「経済的運動法則」を解明することとなった*1。つまりその意味で、マルクスは「近代ブルジョア社会の内部における諸関係の編成」*2 を問題にしてきた。いわばこれは、《歴史的弁証法》を基盤に置きつつも、有機的総体をとらえるための体系構築を目ざす《論理的弁証法》を意味する。

以下においては、『資本論』第二版（一八七三年）への「あとがき Nachwort」における、マルクスの弁証法の説明を最初に考察する。これはマルクス自身によるヘーゲル弁証法の批判的摂取の、いわば最終文言であるので、まずこれを確認しつつ、検討したい。そののちに、それ以前、『経済学批判要綱』（一八五七―一八五八年草稿）の「序説 Einleitung」で展開されたヘーゲル弁証法の批判的摂取の箇所にもどり、そこでマルクスが指摘した、観念論者ヘーゲルの陥った「幻想」の是非について考察したい。ここでマルクスは、ヘーゲル哲学と弁証法について、比較的詳しく扱っているからである。それと関連して、ヘーゲルが重視する「思考と存在の同一性」という形而上学的命題を取り上げ、吟味したい。これをどう評価するかが、ヘーゲルと唯物論の間の対立に大きく関わるからである。以上いずれも、いままで何度となく検討されてきた箇所であるが、あらたに問題提起を試みたい。さて、マルクス・エンゲルス『聖家族』のなかの第五章二節「思弁的構成の秘密」の箇所なども重要だが、本論では扱えなかった*3。最後にマルクスと哲学の関係を議論し

て終わりたいが、この点では、マルクスはヘーゲルとヘーゲル左派の影響を受けつつも、哲学重視の立場から哲学からの離脱へと向かったとされることを再考すべきであると思う*4。そのことは何を意味するのか、現時点であらためて考えるべきだと思う*5。

さて、『資本論』第二版への「あとがき」では、簡潔にマルクスの弁証法観が展開されている。だがそれでも、よく考えると、多くの問題点が浮き上がってくる。

周知のように、マルクスはそこで、「私の弁証法は、その基礎からいって (der Grundlage nach)、ヘーゲルのそれと相違するばかりではなく、それと正反対のものである」*6と結論づけた。マルクス自身によれば、自分の方法は唯物論的弁証法であり、ヘーゲルのそれは観念論的弁証法であるとして、まったく正反対なのである。「その基礎からいって」という表現に、以上の含意があることはだれでもが認めることであろう。そして端的に言って、(唯物論的) 弁証法とは、「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の、その必然的崩壊の理解を含み、その生成する形態をも運動の流れにおいて、したがってまた、その無常の側面から理解し、何ものによっても畏伏せしめられず、その性質上、批判的かつ革命的である」*7といわれるものである。以上のようにして、マルクスは一方で、当時「死せる犬」として扱われていたヘーゲルにたいして「かの偉大なる思想家の弟子」であるとも公言し、他方で、ヘーゲルの「神秘的な側面 mystifizierende Seite」、さらに現状肯定に終わるような傾向を批判する。後者の側面は、すでに『パリ手稿』において、疎外論的視角から十分に批判されていたといえよう。

さてここで、ヘーゲル・マルクス関係についての三つの傾向といわれるものを紹介・検討したい。というのも、以上のマルクスの方法論からでも、ヘーゲル・マルクス関係がいかなるものであるかが、ある程度わかるからである。この点で細見氏によれば、ヘーゲル・マルクス関係について、第一に、観念論か唯物論かを尺度にして、ヘーゲルとマルクスの断絶を強調する流れ(スターリン、ミーチン、旧東独のグロップら)、第二に、弁証法ないし疎外論を軸としてヘーゲルとマルクスの直接の連続性を唱える流れ(マルクーゼら)、第三に、ヘーゲルとマルクスの対立を媒介とした連続性を主張する流れ(レーニン『哲学ノート』、ルカーチら)が存在する*8。以上の展開から見えることは、第一の見解は、弁

証法に関するヘーゲルとマルクスの連続性を軽視する立場であり、第二の見解は、観念論と唯物論の対立面を軽視する立場であるということだ。これは、いわゆるヘーゲル・マルクス主義 (Hegelmарxismus) といわれるものとなる。ちなみに、最近翻訳されたクヴァンテ『カール・マルクスの哲学』は、ヘーゲルとマルクスの関係を最大限重視しており、かつ唯物論と観念論の区別にはほとんど言及しない点で、第二の立場にはいるようである*9。こうして基本的に、第三の見解が妥当であろう。なぜなら、まさにヘーゲルからマルクスへの発展が、観念論から唯物論へとして、弁証法的な意味での対立物への転化であり、同時にそこに、弁証法という共通性が貫くということがいえるからである。とはいえ私は、マルクーゼの深い読解が、フョイエルバッハ的唯物論の意義も強調していないわけではなく、さらに労働における「生きる苦しみ」を提起したりする点で、また労働が「物のもとでおこなわれ、物の法則性に従い、負担性をまぬかれないかぎり、外化と疎外を脱しないと指摘する点で、マルクスをも超えた、何か独自の実存主義的理解に傾いているという印象をもつ*10。さらに、ルカーチ『若きマルクス』などを読むと、ルカーチは、フョイエルバッハ的唯物論の軽視などもあって、ヘーゲル的観念論とマルクスの唯物論の対立面をあまり重視していないように見える*11。

—— 「あとがき」の四つの論点

さらに私は、以下、この「あとがき」に関して四つの論点に触れておきたい。

第一に、マルクスはここで、自分の方法を「唯物論的弁証法」と説明していることの意味合いである。マルクスはあたかもここで、哲学的には、いわば方法論者としてふるまっている。つまり彼は、『ドイツ・イデオロギー』の段階で哲学を批判したのちに、哲学の分野のなかで、「方法論」だけを認めているかに見える。いずれにせよともかく、その前に、唯物論とは何か、観念論とは何か、という世界観的大前提が問題化されなければならないであろう。弁証法もこの世界観的前提によって、おおいに浸透され、変容してしまうのである。だからここで本当は、『パリ手稿』で疎外論的観点から社会認識がおこなわれたように、また『ドイツ・イデオロギー』で史的唯物論の形成、および近代市民社会の批

判のなかで、物象化論の立場から歴史認識が遂行されたように、この現実の世界について議論され、総括されなければならない。それは、エンゲルスが啓蒙的に展開したようには、思考（精神）と存在（自然）との間でいずれが根源的かという形で、唯物論か観念論かを問うという、現実認識なしの、平板かつ抽象的な説明だけですまされるものではないであろう*12。いずれにせよ、ここの「あとがき」では、すでにその場所でもないマルクスは判断して、ごく簡単にしか触れられなかったものと思われる。私見では、《実践的唯物論》の構想を展開したのちに、「唯物論的弁証法」などの方法論的議論をするのが順序である。

ところで、「唯物論的弁証法」の構想については、すでにマルクスはエンゲルスあての手紙（一八五八年一月）で、次のように書いていた。友人の詩人フライリヒラートから贈られた数巻のヘーゲル哲学を読んだことが、おおいに役に立った。もしできれば、ヘーゲルが発見はしたが、同時に神秘化した方法における合理的なものを、印刷ボーゲン二、三枚で普通の人にわかるように書きたいものだ…*13。これは果たされなかったが、この手紙での弁証法のイメージとここ「あとがき」での弁証法や哲学についてのイメージは、おそらく変わっていないことだろう。そして注意すべきは、これから扱う『経済学批判要綱』「序説」（「経済学の方法」を含む）はすでに一八五七年八月に書かれたという、マルクス自身の記録があるので、この「序説」はヘーゲルに関して、すでにそれまでに形成された知識で書いたと推定されるということである*14。

第二は、マルクスがいう、理念的なもの（現実）との関係の問題である。マルクスは『資本論』で、「私の弁証法は、その基礎からいって（der Grundlage nach）、ヘーゲルのそれと相違するばかりではなく、それと正反対のものである」と述べた箇所に続いて、次のように述べる。「ヘーゲルにとっては、彼が理念（Idee）という名称を付してひとつの自立的主体に転化さえした思考過程（Denkprozess）が現実の形成者（Demiurg）であって、それがまさに自分の外的現象を形成するのである。私にあっては反対に理念的なもの（観念的なもの das Ideelle）は、人間の頭のなかで転換され、翻訳された物質的なもの（das Materielle）にほかならない。」*15

以上は、神秘的に見えるヘーゲル的「理念」が実は、物質的なものからの何らかの転化

物であり、その反映であるにすぎないという意味で、ヘーゲルの観念論にたいする、マルクス自身の唯物論の、真っ向からの対置の叙述であるといえよう。これは、さきほどのエンゲルス『フォイエルバッハ論』における唯物論的主張と重なるものと思われる。私は一唯物論者として、究極的にこの唯物論的指摘に賛成はするが、それでもこうした説明は、哲学的にいて、何か抽象的で平板なような気がする。とくに私がひっかかるのは、客観的観念論者ヘーゲルでは、古代ギリシャ以来の哲学史の複雑な展開を踏まえて、プラトンのイデアの意味も含めて、「理念」とはそもそも通例の主観的な理念とは異なる意味合いをもっていたのであるから、哲学的テーマにもっと深く即して探究する必要があるのではないかということだ。この点、次節では、『経済学批判要綱』「序説」の「経済学の方法」にそって、ヘーゲル的な「理念」や「思考過程」についてさらに再考したい。

第三に、第二の哲学史的事実にも関連することである。すなわち、ことばじりをとらえるようではあるが、「デミウルゴス」といわれる神の性格についてである。キリスト教を重視するヘーゲルからすれば、また当時のマルクスにあっても、ヘーゲル批判との関連でここで想定されるべき神は、キリスト教の「父」としての神、つまり創造主 (Schöpfer) であるはずである。ところが、ギリシャ神話のデミウルゴスとは、プラトン『ティマイオス』などに現れるものであり*16、古代ギリシャ哲学の研究者の岩崎氏によれば、諸説を検討したうえで、「プラトンは、諸要素の構成される以前に何らかの先在質料を想定したうえで、デーミュルゴスがその無秩序な状態を秩序へと導いた…ものとして描いている、と思われる」*17とされる。つまりキリスト教が『聖書』の「創世記」にもあるように、「無からの創造」を主張するとすれば、他方、ギリシャ哲学は「何ものも無からは生じない」という考えに近い。アリストテレスによる「純粹形相」としての神もまた、「不動の動者」として万物を動かすものではあるが、そのさい、それら自然存在はすでに前提されている。したがって、古代ギリシャの時代のほうがまだ唯物論的であったといえるだろう*18。以上の確認ののちに、私は、古代ギリシャのデミウルゴスとキリスト教の神の質的差異のもつ哲学的・弁証法的な含意を議論したかったが、あえて問題提起にとどめたい。

第四に、いわゆる「転倒」の問題である。「弁証法は、ヘーゲルにあっては逆立ちして

いる (steht ... auf dem Kopf)。ひとは、合理的核心を神秘的外皮のうちに発見するためには、それ〔ヘーゲル弁証法〕を転倒させ (umstülpen) なければならない。」*19 ここでまず注意すべきは、「逆立ちしている」とか「転倒させる」といっても、それはレトリカルな表現であり、実際にヘーゲルや弁証法を転倒させるわけにはいかない。逆立ちしているものをさらに転倒させ、正立させるべきだといっても、実際にその中身はどういうものになるのか、明らかではない。すでに私は、旧稿 (中) などにおいて、ヘーゲル哲学の疎外と転倒の状況を議論したので、ここでまたヘーゲル批判をくり返さない。それはすでに、『パリ手稿』、『ドイツ・イデオロギー』などで果たされたといえよう。さらにいえば、「合理的核心を神秘的外皮のうちに発見する」ということをまともに受け取ると、むしろ内部の「合理的核心」を表へ出すという意味であるから、umstülpen を「転倒させる」ではなくて、手袋の内側を外へとめくり返すように、むしろ「反転させる」といったほうが適切であるという見解もある*20。だがそうすると、逆立ちしたものの転倒という表現とは直接はつながらなくなるだろう。

以上、上記の「あとがき」で弁証法に関わるかぎり、いくつかの論点にそって考察してみた。さらに私は、上記の問題点の解決を目指して、『経済学批判要綱』「序説」での展開を中心に議論したい。

一二 ヘーゲルが陥った「幻想」とは何か

『経済学批判要綱』「序説」における第三節「経済学の方法」は、さらにヘーゲルや弁証法についても論じており、同時に経済学の認識もさらに進んでいる。そしてすでに、そこで《論理的弁証法》、つまり体系認識のための弁証法について具体的に議論されている。ここでの弁証法についての考え方は、さきに見た『資本論』第二版の「あとがき」とほぼ同じであると思われる、むしろより詳しく考察されている。「経済学の方法」の箇所は、弁証法についての豊富な議論を含んでいるが、とくに私はここで、ヘーゲルが陥ったとされる「幻想 Illusion」の内容の妥当性について詳しく考察したい。この「経済学の方法」の箇所もたびたび検討されてきたが、ここでのマルクスの説明に、マルクス主義者として

異論を挟んだ論者はいなかったように思われる。ところで興味深いのは、マルクスはここでヘーゲル『法哲学綱要』についても方法論的に論じているが、もはや「ヘーゲル国法論批判」（一八四三年夏）執筆の時期とは異なり、『論理的弁証法』、論理と歴史の関係などについても具体的に展開している。というのも、『法哲学綱要』は、ヘーゲルの生きた当時の社会の全体構造を、「抽象法→道徳→人倫（家族→市民社会→国家）」というように、まさに抽象から具体へと体系的に展開した著作であるからだ。マルクスもこの意味で、『法哲学綱要』を『論理的弁証法』の観点から、方法論的に読解しているのである。

さて、周知のように、マルクスはそこで、一七世紀の経済学者の方法である、下向法とされる「第一の道」と、上向していく「学的に正しい方法 wissenschaftlich richtige Methode」である「第二の道」について、区分して語っている*21。「第一の道」とは、生きた社会全体である人口、国民、国家などの分析によって、下向法的に分業、貨幣、価値などを見いだして、そこで考察を終えるものである。「第二の道」は逆に「後方の旅」として、労働、分業、欲求、交換価値という抽象的なものから、国家、諸国民の交換、世界市場にまで上向する。「第一の道」では全体的な表象が蒸発させられて、抽象的規定が生まれるが、スミス、リカードらの古典派経済学に始まる「第二の道」では、今度は抽象的規定が思考の道をへて、具体的なものの再生産へと向かう。まさにこれは、眼前にある有機的な総体を体系的に、「多数の諸規定の総括」として具体的にとらえるという意味で、『論理的弁証法』を含んでいる*22。

以上の説明ののちに、ヘーゲルの観念論的弁証法を念頭に置いて、マルクスは次のように批判する。「したがってヘーゲルは、実在的なものを、自己を自己のうちに総括し、自己のうちに深化していき、そして自己自身から発して運動する思考の結果として把握するという幻想（Illusion）に陥ったのであるが、しかし抽象的なものから具体的なものへと上向する方法は、具体的なものを自己のものとし、それをひとつの精神的に具体的なものとして再生産するための、ただ思考にとっての方式であるにすぎない。しかしそれは、具体的なものそれ自体の成立過程ではけっしてないのである。」（S. 36. 五〇頁）

一見すると、唯物論者マルクスによる観念論者ヘーゲルへの批判として、妥当なことが

述べられているように見える。マルクスによれば、ヘーゲルが頭脳内の思考の活動と、その外部にある「実在的な主体」(S. 37. 五一頁)の運動を混同するという「幻想」に陥った、または主観的な概念やカテゴリーといわれるものが現実を産出するという「幻想」に陥った、というのであろう。唯物論的立場からヘーゲル哲学を研究してきた私も、何となくこのマルクスの批判を受容して、かつて違和感をもたなかった。しかし、意識から独立している「実在」を「思考の結果」としてとらえることは、もしここでの「思考」が人間の主観的な思考であるとすれば、それがいかに運動しようとも、そのままでは、「実在的なもの」を産出するというようなことは、主観的観念論者のバークリの説くような主客相関の哲学や独我論のように、感覚(意識)と実在が基本的に同一であるならば可能かもしれないが、客観的観念論者であるヘーゲルでも、それは認められないのではないか。まさにヘーゲル自身が、「哲学的理念にたいして、思考と存在は異なっているとくり返して主張する人たちは、そのことは哲学者たちにもわかっていないわけではないということをやはり前提してものをいってもらいたいものだ。実際これほど、わかりきった知識はありえないではないか」*23とおおいに抗議しているのだ。ヘーゲルもまた、自分という意識主体の外部に「実在」(結局、その本質は精神的なものだが)があるということを、まずは認めるであろう。ヘーゲルでは、「思考」も「存在」も哲学的に含蓄のある用語であり、問題は意識主体と「実在」との複雑でダイナミックな関係の解明である。

たとえば、『精神現象学』の叙述を見れば明らかなように、まずは意識主体と対象世界が相互に独立しつつも、同時に関係しあい、相互に浸透しつつ、段々と複雑化して展開されている。最初の意識章の「感覚的確信」の対象の「このもの Dieses」や「知覚」の対象の「物 Ding」では、単なる物理世界が扱われるが、自己意識章では、対象は、「生命」になる段階から、欲望をもつ別の(自己)意識に転換する。ここでは意識対象は、「主人 Herr」となり、恐れと奉仕によって労働する「奴隷 Knecht」となり、さらにそこから生まれる労働産物となる。下って精神章では、意識主体としての個人は、共同の行為主体となる家族、民族などの「共同体 Gemeinwesen」*24のような産物を対象としてもつ。だから、精神章では、ほぼ意識主体と対象世界は相互に豊かに産出しあう関係となる。「思考」と

「存在」は、主体と客体（実体）といかええていいものであり、以上の複雑な含意をもって相互に浸透し合っているのである。これがまさに現実世界というものだ。以上の『精神現象学』の展開こそが、その結論として、「思考と存在の同一性」という学的境地を証明することになっている。

いずれにしても、そこに宗教と同様の「幻想」があるとしても、ヘーゲルをカリカチュア化せず、その観念論にたいして、研究の発展した現段階で、もう少し丁寧な読解が必要ではないだろうか。多分これでは、多くのヘーゲル哲学研究者を説得することはできないであろう。

さて、マルクスはヘーゲル批判をさらに続ける。「哲学的意識では、概念把握する思考が現実的人間であり、概念把握された世界がそのものとしてようやく現実的世界であるというように規定されているが、したがって、こうした意識にとって、カテゴリーの運動が現実的な産出行為として現れ、その行為は残念ながら外部から衝撃だけを受け取るのであり、——その結果が世界なのである。」（S. 37. 五〇頁以下）

「哲学的意識」の誤りとして、人間の本質を単に抽象的な思考のなかに見ること、さらに認識的に概念把握された世界こそが現実的世界であり、カテゴリーの運動が現実の産出行為となっているということ、が指摘されている。人間の本質を抽象的な思考に見ことは観念論に特有の偏りであるとしても、ヘーゲルにとっても意識の外界に存在する世界が「現実的世界」であるはずであり、ただ概念把握された世界は、「現実的世界」の認識された真の世界なのである。さらにここで、「その行為は残念ながら外部から衝撃だけを受け取るのであり」とあるのは、感覚的な素材を外部から受容したのちに、概念による認識が始まるということの意味するだろう。ところで、ここでいわれる「思考」「カテゴリー」などが、人間が主観的に立てるものだけではなくて、現実のなかにも存在する、何らかの客観的なものだとしたら、どうだろうか。すでにさきの『精神現象学』での簡単な説明でも明らかなように、対象的な世界は、社会实践とともに、人間の思考、意識、目的などが折り込まれて成立した世界であり、だから世界自身が思考と存在の同一化現象である。ヘーゲルによれば、世界は過去からすでにそうした人間（→神）の行為と目的の産物以外

ではなかった…。次節で述べるように、広くヘーゲルは「思考と存在の同一性」という形而上学の伝統的命題によって、同一哲学的に、すでに客観的現実そのものが何らかの概念的な構造や法則性を内包しており、まさに人間の側が、主観的な概念やカテゴリーによってそれをとらえられると考える。現実のなかに思考、概念、理性、理念などといわれるものがすでに内包されているとすれば、それがそれ自身観念論的な誤りだとしても、それほどおかしい主張とはならないような気がする。むしろそれこそ、客観的観念論者ヘーゲルそのものの言い分なのではないか。

続いてマルクスは、現実認識が直観と表象の外部で、それを超越するところで思考し自己を生み出す概念の産物ではなくて、直観と表象を概念へと仕上げていくさいの行為の産物だと、ヘーゲルを批判する (S. 37. 五一頁)。いわゆる概念の自己運動への批判でもあるが、だがそれでも、まさにヘーゲル自身が、「感情、直観、欲求、意志などの諸規定は、それらが意識されているかぎり、一般に表象と呼ぶことができる。そのことによって一般的に、哲学は表象を思想やカテゴリーに、さらに正確には、概念に置きかえるものだということができる」と、ほぼ同様なことを述べている*25。ヘーゲルもある意味で、直観、表象から概念が産出されることを積極的に認めている。概念がすでに直観、表象という低次の認識能力に潜在化しているというのであろう。

以上きわめて荒っぽく主張してきたが、次節以下では、もう少し丁寧に、哲学的に議論していきたい。(続)

*1 MEW 23, S. 15f. 刊行委員会訳『資本論』①、大月書店、第一版への「序言 Vorwort」参照。

*2 MEGA II/1. 1, S. 42. 『資本論草稿集』①、大月書店、六二頁。

*3 この点では、廣松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂、一九六八年所収の「弁証法の唯物論的顛倒はいかにして可能であったか」(二—一頁以下)、さらに現代の理論社・編『マルクス・コメンタール』II、一九七五年所収の良知力氏のコメント(一九五頁以下)、が参照されるべきである。

*4 周知のように、マルクスは『経済学批判』「序言」で、ドイツ哲学のイデオロギー的見解を批判して、われわれ〔マルクスとエンゲルス〕の以前の「哲学的な道德意識 philosophisches Gewissen」を清算することを決意した、と述べている。それは一八四五年春のこととされ、周知のように、この成果が『ドイツ・イデオロギー』であるが、出版社の事情で出版できなかったものである。この点では、佐々木隆治『カール・マルクス』ちくま新書、二〇一六年、七二頁以下の「哲学からの離脱」の項目を参照。

*5 マルクスと哲学の関係についての最近の考察として注目されるべきは、下記の註九のクヴァンテの著作とともに、牧野広義『マルクスの哲学思想』文理閣、二〇一八年、九六頁以下における議論である。そこでは、渡辺憲正、田畑稔、佐々木隆治の諸氏への批判的コメントがある。

*6 MEW 23, S. 28. 前掲訳『資本論』①二二頁。

*7 MEW 23, S. 28f. 前掲訳、二三頁。翻訳では、「なにものにも動かされることなく」となっている。ここでマルクスによって指摘されている内容は、明確であると思われるが、加藤氏は「何ものによっても畏伏せしめられず sich durch nichts imponieren läßt」の箇所を、「何物かによって作られた印象ではなく」というように訳す。それほど詳しい説明はないので、その意図は不明である。加藤尚武『哲学原理の転換』未来社、二〇一二年、一〇二頁参照。

*8 以上、細見英『経済学批判と弁証法』、未来社、一九七九年、一〇頁における区分である。なお本書は、《実践的唯物論》形成のレベルに到達する前の、すぐれたマルクス（主義）研究の著作であろう。

*9 クヴァンテは、マルクス理論を哲学の立場から徹底して検討するという点で、おおいに興味深い。その点で、初期マルクスの「類的实在 Gattungswesen」の構想が後期にまで継承されるという新鮮な見解は注目に値するが、マルクスの「類形而上学」を自明の前提としている点は、おおいにひっかかる点である。ミヒャエル・クヴァンテ『カール・マルクスの哲学』（大河内泰樹・他訳）リベルタス出版、二〇一九年、四〇頁以下、五八頁以下など参照。唯物論への言及は調べたかぎり、わずかに、前掲訳、九三、一〇〇頁な

どにある。はたして類的実在概念を重視することが、そのまま非唯物論的な形而上学に帰着するのだろうか。

*10 マルクーゼ『初期マルクス研究』（良知力・池田優三訳）未来社、一九六八年、一二三頁以下、一三〇頁以下など参照。

*11 ルカーチ『若きマルクス』（平井俊彦訳）ミネルヴァ書房、一九七六年、六五頁参照。なお細見氏も、「ヘーゲルとマルクスの方法における対立性が軽視されてはしないか」（前掲書、一一頁）と指摘して、ルカーチの立場が第二の立場にも近いということを述べる。正当な見解と思われる。

*12 MEW 21, S. 274ff. エンゲルス『フォイエルバッハ論』（渡邊憲正訳）、大月書店、二〇一〇年、第二節（七〇頁以下）の叙述などを参照。なお田畑稔『マルクスと哲学』新泉社、二〇〇四年の補論一（四七三頁以下）は、シュタルケ『フォイエルバッハ論』との関連で、きわめて詳細かつ批判的に、エンゲルス『フォイエルバッハ論』を再読していて興味深い。

*13 MEW 29, S. 260.

*14 MEGA II/1, 1, S. 17. 『資本論草稿集』①、二四頁参照。

*15 MEW 23, S. 27. 前掲訳『資本論』①、二二頁。

*16 『プラトン全集』第六巻、角川書店、一九七四年所収の「ティマイオス」（泉尚典訳）では、「デミウルゴス」は「製作者」と訳されている。同書、索引の二六頁を参照。このデミウルゴスが下位の神々をも生んだとされる。

*17 岩崎允胤『ギリシャ・ポリス社会の哲学』未来社、一九九四年、三三九頁。氏は典拠として、「ティマイオス」30a, 48b を挙げる。

*18 ところで加藤氏は、マルクスの意図に即して、ここでヘーゲルのいう「理念」がギリシャ的な神に類比的であり、デミウルゴスを「造物主」と訳するのは正しいが、「創造者」とは訳せないと主張する。この点には賛同したいが、ヘーゲルの理念が問題となるのならば、やはりそれはキリスト教の神であるのではないか、という問題が残るだろう。加藤尚武『哲学原理の転換』未来社、二〇一二年、九六頁以下参照。

*19 MEW 23, S. 27. 前掲訳『資本論』①、二三頁。

*20 クヴァンテ、前掲訳、一六四頁で、そう示唆される。ヘーゲル研究者として知られるハンス・フルダがまずそう提案したようである。なお私は旧東独の哲学者から、以前に同様のアイデアを聞いたことがある。

*21 Vgl. MEGA II/2. 1, S. 36f. 『資本論草稿集』①、四九頁以下参照。以下この箇所は、本文中に引用箇所を示す。なおこの「学的に正しい方法」とは、石井氏が指摘するように、すでにヘーゲルの弁証法的体系展開の方法でもあろう。マルクス自身は、このヘーゲル的弁証法を以前は「思弁」として否定してきたのである。石井伸男『マルクスにおけるヘーゲル問題』三四頁。

*22 もちろん『資本論』第二版の「あとがき」や、ここでの「序説」だけでは、マルクスの弁証法的内容は尽くされていない。この点で、さらに拙論「ロゴスの弁証法的発展」（共著『哲学のリアリティ カント・ヘーゲル・マルクス』有斐閣、一九八六年所収）、一七一頁以下を参照。なお同書では、ヘーゲルの陥った「幻想」には言及されていない。当時私は、この箇所にとくに疑問を抱かなかったのである。

*23 Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I*, Suhrkamp, TW8, § 5 1. 『小論理学』上（松村一人訳）岩波文庫、一九六頁。

*24 Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, TW3, Suhrkamp, S. 329. 檜山欽四郎訳『精神現象学』河出書房、二五九頁。

*25 Hegel, *Enzyklopädie I*, § 3. 『小論理学』上、岩波文庫、六五頁。